

じょうくち

お錠口のなかにいたのはだれ？

おもておしめきり

-「表御 $\times$ 切」と福井藩の奥向-

幕末の福井藩主松平春嶽（慶永）は、江戸城には黒書院のある表向と、將軍の執務・生活空間（奥向）との間に杉の板戸でできた「上ノ錠口」があったと回想しています。同様な出入り口は福井藩邸にもあり、「表御錠口」と呼ばれていました。

福井藩にはこの「表御錠口」をしめ切りにする「表御 $\times$ 切」という手続きがあり、正室や姫などがふだん暮らす大奥（女性の空間）から藩主のいる御座の間（男性の空間）へ入る際に行われていました。さらに藩主も「表御 $\times$ 切」で大奥に入って夕食をとることが定例でした。

このような「表御 $\times$ 切」が、誰のために、どのような場合で行われたのかを検討することを通して、19世紀前半における福井藩松平家の奥向の特質を紹介します。

